

# 人、海峡を結ぶ門司ヶ関



下関・火の山(手前)から海峡を挟んで望む門司ヶ関。その歴史は人を引き付ける

ワカメ刈り神事で知られる門司区・和布刈神社一の鳥居脇の小さな公園に、自然石に刻んだ「門司関址」の碑が立つ。この地がかつて関門海峡を挟んで九州側にある西海道への出入り口、陸・海路の重要な関だったことを示す。今、周辺環境、情勢は様変わりしたが立地は全く不変。劇的ドラマも多く、訪れる人を古代ロマンにいざなう。

## 関の開所は600年代以前

門司についての学術的な研究、論考は数多い。うち関の歴史、地名に関しては①日本書紀安閑天皇2年(535年)の条に「豊国のみさきなどに屯倉を置く」とある。豊国のみさきは門司を指し、この時に門司関も誕生した②日本書紀孝徳天皇の大化2年(646年)に「諸国の関宿を定む」とあり、門司関も置かれた③門司の地名については桓

武天皇の延暦15年(796年)、太政官符に記されているのが史料に見える最初——などとされてきた。

ところが地名については平成8年(1996年)、山口県美祿市美東町の長登銅山跡から「豊前門司」と記した木簡が出土。天平年間(729〜749年)の早期と推定され、従来説を半世紀遡った。長登銅山文化交流館の池田善文館長は「この木簡は長登産出の銅を豊前国府に送る荷札とみられ、豊前国府から大宰府へ運ばれたのでは」と話す。門司の読み方について、銅山を訪れた考古学者の森浩一「日本の歴史には必ず門司が登場する」と話すのは北九州市埋蔵文化財調査室の梅崎恵司学芸員。関門が舞台になった源平合戦、長州と小倉藩の戦争はあまりにも有名だが、時代は遡って



文字ヶ関公園に立つ門司関址の碑

行き遍ぐる心は文字の関屋より

とどめ先に書きそのこれる

源俊頼(平安朝の貴族、任地の大宰府からの帰京時の作)

豊国の門司の関屋の石清水

くみて昔を知る人もかな

川江直種(江戸末期、明治の歌人、篠崎八幡宮司)

この歌の碑は明治時代から長く門司関址の碑の横にあったという。しかし損傷し、1971年、縁戚にあたり門司関址とも言われる甲宗八幡宮の境内に、両社などによって再建された。



甲宗八幡宮に立つ川江直種の歌碑

## 歴史も自然も門司の誇り

関門は今、橋と鉄道・国道・人道トンネル、船で結ばれ毎日幾万の車、人が行き交う。今年2018年は、うち国道・人道トンネル開通60周年に当たる。戦前の1939年にまず試掘隧道が開通、「さあ本掘りに」というところで第2次世界大戦突入により工事は中止され、戦後、事業を再開して完成・開通したのが1958年3月9日だった。2重構造で上が国道2号の車道、下が人道。総工費57億円。完成までに事故などで53人もの尊い犠牲が生じた。今、老朽化の影響も考慮して新たに第3の関門道路「下関北九州道路」の実現

に向け、福岡、山口両県、北九州、下関両市が結束して運動を始めている。

その関門、門司関について梅崎さんは言う。「森林からの急流の小河川が多いことなどから水が清潔という世界に誇れる環境が生まれている。海峡は1日2万隻が往来しているのに汚れてはいない。歴史も自然も地元の誇りです」

シニアスタッフ 村田和夫

※1 文字ヶ関公園

中世の応永年間、門司の寺に中国から経文が入ったことから版木を作り印刷した。大陸文化輸入の玄関口で、文人墨客の出入りも多かったことから市町村制が始まった明治元年から5年間、門司は「文字ヶ関村」の名だった。公園名はその名残でもある。

## 北九州歴史文化塾

### 門司ヶ関

関門海峡を挟んで山口県・下関と対峙する門司。九州の最北端に位置する海陸交通の要衝として古から重要な役割を背負ってきた。通行を扼したかつての「関」は役割を終えたが、交通の要衝であることは今も変わらない。その姿、変遷を訪ねます。

**テーマ** 古来より、人、海峡を結ぶ門司ヶ関  
**開催日時** 5月17日 13:00～  
**集合場所** 12:50 旧門司三井倶楽部 乗用車利用者は13:00にノーフォーク広場  
**講師** 北九州シニア応援団スタッフ  
**受講料** 500円  
**【参加お申し込み・お問い合わせ】**  
 さくら編集部 ☎ 093-965-6080



### 文字ヶ関公園

ノーフォーク広場に接してあり、「門司関址」の石碑が立つ。碑は5市合併前の旧門司市と同市観光協会が建てた。石材の説明版には源俊頼の歌を刻んでいる。

### 甲宗八幡神社

貞観2年(860年)、清和天皇の勅命で建てられ、ご神体が甲(かぶと)であることから今の神社名になったと言われる。戦勝祈願の神としてあがめられ、足利尊氏寄進状などが残る。